

特集

はたらくということ

— 私たちにとって「はたらく」・「いきる」ということ

東北の震災を機に、いま私たちはあらためて働くことの意味や価値について気づかされてきた。多くを失いながらも家族や仲間、地域とともに協同し、ゼロから仕事をおこし、苦闘しながらも働くことができる喜びを語る被災者たちと、しばしば出会うことがある。彼らと逢うと、人間にとって「はたらく」ということが単に生活の糧を得るためだけではなく、どのように働くかということがどのように生きるかということと直結しており、社会とつながり、だれかの役に立っているというよろこびが生きることへの価値と重なっているを感じずにはおれない。それは、人が人らしく生きる権利であり、またそれは「はたらくことの権利」をだれもが有するということでもある。

一方、震災以前から働くことが叶わない状況に追いやられた人たちが多数存在している。地域が崩壊し、家族も孤立する時代に、社会とのつながりも希薄で、仕事も収入も家族や友人も持たない人たちが多数おり、その一部が生活保護受給という形で顕在化し、その数は増加の一途をたどっている。昨今の保護費増大や不正受給事件をめぐって、世論の生保受給者への風当たりは増す一方であり、結果、支援を必要としている人を制度から遠ざけ、困窮者をさらに追い詰め、餓死者や自殺者を生み出す結果を招いている。

労協連も『完全就労(雇用)社会』を目指す『新時代の労働政策』を打ち出し(2010年度総会時)、労働政策を提起してきたが、非正規雇用者や失業した中高年者、シングルマザーや障がい者、ひきこもりなどの就職経験のない若者など、「社会的弱者」と呼ばれるこうした人たちの多くが、自助努力ではどうにもしようがなく、働くことに辿りつけないまま負のスパイラルに落ち込み、苦しんでいる。こうした人たちへ、そこから抜け出すための職業訓練や生活支援といった社会保障の層の厚さを増幅・強化するとともに、彼らが秘める痛みや弱さを理解し、受け皿となる多様な支援者や社会的企業などの存在が不可欠といえよう。

今号ではこうしたさまざまな困難な立場にある当事者、私たち自身にとって、「はたらく」ということの意味と価値を改めて問い直し、そこから共に生きるこれからの社会のあり方を考えたく思う。

(編集部)